

## 【論 説】

# ギリシアポリスの形成と市民

敬 一 的射場

### 目 次

- はじめに
- 1. 前史
  - 1.1. ミュケナイ文明
  - 1.2. 暗黒時代
  - 1.3. ギリシア・ルネサンス
- 2. 市民的なるものの成立
  - 2.1. クローレスと天水農業
  - 2.2. 農民＝戦士
  - 2.3. 英雄的精神とアゴーン
- 3. ポリスの形成と市民
  - 3.1. アテナイとテセウス伝説
  - 3.2. 都市空間
  - 3.3. 市民
- おわりに

## はじめに

都市住民という意味での市民は、都市が発生して以来、世界中のあらゆるところに存在する。しかしながら、市民権を有する市民、つまり、当該の政治共同体の成員として自由と平等を享受し、政治に参加し国政の一翼を担うという意味での「市民」が誕生するのは、ギリシアの都市国家ポリスの創設をもって嚆矢とする。

紀元前5世紀から3世紀にかけての古典期のアテナイにおいて、芸術・科

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

学・哲学などの分野で後世に大きな影響を与えるほどの市民文化が花開いた。プラトンやアリストテレスという哲学の巨人を生み出しただけでも、その後の哲学史に対する寄与は多大なるものである。精神世界での大きな貢献をなしたアテナイは、オリエント世界の帝国と比するとその規模は比較にならないほど小さいものであった。総人口がピークに達したのは紀元前431年、ペロポネソス戦争がはじまった時と推測されているが、女性や子供、そして奴隷を含めてもその総人口は25万あるいは27万5千ぐらいだった<sup>1)</sup>という。そのうち市民の数は、わずかに数万にすぎない。その文化的な生産性の高さには、驚嘆せざるをえない。

ギリシア世界においてポリスという都市国家が建設されたのは、紀元前8世紀頃のことであるが、それよりも数百年前にミュケナイ文明という宮殿文明が栄えていた。それは暴力を背後においた威嚇や命令によって人を動かし支配するというオリエント的な専制国家であり、上下的な支配服従関係は自明の前提であった。つまり垂直的に結合する社会であった。これに対して、ポリスでは、市民間の関係は水平的なものであった。市民は互いに対等であり、自由であったからである。

オリエントの専制の垂直的な社会結合とポリス的な水平的な社会結合との違いを、ハンナ・アーレントは、人を扱う「前政治的方法」と「政治的方法」という対比で説明している。

「ギリシア人の自己理解では暴力によって人を強制すること、つまり説得するのではなく命令することは、人を扱う前政治的方法であり、ポリスの外部の生活に固有のものであった。すなわちそれは家長が絶対的な専制的権力によって支配する家庭や家族の生活に固有のものであり、その専制政治がしばしば家族の組織に似ているアジアの野蛮な帝国に固有のものであった。」<sup>2)</sup>

ギリシア人の「自己理解」においてはという条件つきではあるが、「人を扱う前政治的方法」とは、「暴力によって人を強制すること、つまり説得するのではなく命令すること」なのである。ポリスの成立したギリシア世界においても、「家長」たる市民は、家庭という私的領域においては、奴隷に対してだけ

でなく妻や子供にたいしても「絶対的な専制的権力によって支配」していた。

これに対して、アーレントは、政治的方法をポリスで生きることと結びつけている。

「政治的であるということは、ポリスで生活するということであり、ポリスで生活するということは、すべてが力と暴力によらず言葉と説得によって決定されるという意味であった。」<sup>3)</sup>

アリストテレスによれば、ポリスは「人びとが生きるために生じたのであるが、彼らがよく生きるために存在するもの」<sup>4)</sup>であり、それゆえに、人間は「政治的動物」(zōon politicon)つまり「ポリ斯的動物」なのである。政治学を意味する politics が、ポリス (polis) の派生語であることを想起すれば、政治的であるということの意味することは明白であろう。それゆえに、ギリシアポリスの世界では、市民的であるということは、政治的であるということと同義であった。

市民とは、<sup>シユノイクスモス</sup>「集住」(synoikismos)によってポリスに結集した人々のことであるが、それは我々が今普通に考える都市住民としての市民ではなかった。市民の中核をなしたのは、耕作地をもつ農民であり、彼らは同時にポリスの防衛の義務を担う武装自弁の兵士であった。それは、芸術・科学・哲学などの分野で多大な貢献をなし市民文化が開花したアテナイにおいても事情は同じであった。華やかに展開した市民文化とその市民の中核を占める農民との間には、何かそぐわぬものを感じる。農民ということで連想されるのは、年から年中、朝から晩まで、土と向き合う姿であり、開明性とはほど遠い閉鎖的で保守的な姿である。権威に盲従する「物言わぬ農民」というイメージさえ抱かせる。

本稿は、ギリシア世界において、ミュケナイ文明の垂直的な社会結合がどのようにしてポリスの水平的な社会結合へと変わったのか、あるいはなぜそのようなポリスが生まれたのか、また、市民の大半が農民であるのになぜにそのような知的多産性をもちえたのか、これらの問いに対し歴史学の知見を借りながらその一端を明らかにしようとする試みである。

## 1. 前史

### 1.1. ミュケナイ文明

ホメロスが、トロイアとの戦争を始めたギリシアきっての強力な王アガメムノンの居城として描いたのがミュケナイ<sup>5)</sup>である。そこは、当時屈指の繁栄を誇っていた。ミュケナイ文明の始まりは紀元前1650年ごろのことである<sup>6)</sup>。ミュケナイ文明は「前1200年のカタストロフ」<sup>7)</sup>で崩壊するまでのおよそ400年間、ミュケナイの宮殿を中心に繁栄した。それは、エーゲ海のクレタ島を中心としたミノア文明を継承しながらも、母権的で平和なミノア文明とは異なり、父権的で戦士的な文明であった<sup>8)</sup>。

ミュケナイの宮殿は、メガロンと呼ばれる王の座所を核とする求心的な構造を特徴としていた。4本の柱によって支えられていたメガロンの居室には宗教的な機能をもつと考えられる円形の炉があり、傍らの壁際には王座もすえられていた<sup>9)</sup>。王という個人に対する権力の集中が進んでいたことを示している。これらの宮殿は丘の上に城壁をめぐらして建てられていたが、その城壁は敵の攻撃に備えて自然の巨石を積み上げた分厚いものであり、厚さ3メートルから9メートル、その高さは7メートル半を超える<sup>10)</sup>こともあった。そこには周囲を監視し、防備するという軍事的色彩が強くあらわれている。この巨大な城壁をもつ遺跡を目にした古典期のギリシア人たちは、これをつくったのは人間ではなく、神話に登場するキュクロプスという一つ目の巨人族に違いないと考えたのだろう。彼らはこのような巨石を積み上げる城壁建造様式を、「キュクロプス式」と呼んだ<sup>11)</sup>のである。

城壁の壁がはるかに薄かった都市国家ポリスが、公共の広場であるアゴラ (agora) や市庁舎などの公共物だけでなく多くの都市住民の居住区を含んでいたのに対して、ミュケナイ文明ではこのように頑丈な城壁で囲まれた地域はきわめて狭く、王家の居住区や宮殿の貯蔵庫だけでありそれ以外の地域まで含むことはまずなかった。これはミュケナイ文明の特色をよく示している。ミュケ

ナイ文明において人的資源と物的資本は、書記官・官僚・王族をまもることに投入されており、周辺の耕作地や一般住民をまもる歩兵軍団の編成などは、ないがしろにされていた<sup>12)</sup>。

宮殿の発掘跡から王家の書記が記録したと思われる粘土板が発見された。その粘土板は、ミノア文明と同じく線文字で書かれていたことから、ミノア文明の文字が線文字A、ミュケナイ文明の文字が線文字Bと呼ばれている。その線文字Bがイギリスの若き建築家マイケル・ヴェントリスによって1952年に解読された<sup>13)</sup>ことで、ミュケナイ社会の構造が次第に明らかになってきている。その粘土板には、土地の割り当てや奴隷の分配、職人に命ずる製品の種類の数、農民に課した農作物の供出量や未納分、家畜の徴収や労働力の徴発などが詳細に記録されており、食糧の配分なども一々名をあげ人数を誌して、その量が規定されている<sup>14)</sup>という。王の周囲には多くの官僚がおり、さまざまな職種を分担して人民の社会生活をこと細かく規制していた<sup>15)</sup>ことが分かる。この社会は、線文字Bで「ワナカ」（ギリシア語のワナクス wanax）と表記された強力な「神的王」によって支配されており、王は、戦争と平和を決し、さまざまな祭祀をとりおこない、年貢をとりたてて賦役を課し、通商を許可し物品の製作を命じた。軍事・宗教・政治・経済のすべての権力はかれの一手に握られていた。つまり、ミュケナイの諸王国は、「奴隷制と貢納制をもつ」<sup>16)</sup>官僚制的貢納国家であり、ギリシア人によって形成されたものであるにもかかわらずオリент風の専制君主国家であった。

だが、大河のほとりに大規模な運河を建設し灌漑農耕によって成立したオリент世界の帝国が、巨大な土木事業を遂行するためにも強力な中央集権国家を必要としたのに対して、ギリシアでは、天水に頼る農業であったので、そこまでの王権の強大さを必要としなかった。それゆえその専制主義による統一もオリент世界の帝国ほどに強固かつ強大ではなく、ミュケナイの王を宗主としつつも、いくつかの小王国が分立し、それぞれがいわばオリент的な小型の専制国家にとどまった<sup>17)</sup>。ミュケナイ文明の統一性は、現実には多数の国家に分裂したこの世界における宮廷文化の統一性と、伝承から推定される諸王

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

間の密接な、しかし、個人的な関係によって保たれていた<sup>18)</sup>のである。

ホメロスの英雄叙事詩でも描かれている、戦車を駆って戦力の中心となる貴族的戦士は、王に隷属していたわけではなく、相対的に独立していた<sup>19)</sup>。つまり、軍隊は王の傭兵でも家産軍隊でもなく、支配下村落の「バシレウス」(basileus、部族長あるいは王)は、王の家臣ではなかった<sup>20)</sup>。

同時代のオリエント世界において社会的統合の核となっていたのは、ときには神と同一視されるほどの絶対性を示威する王の存在だった。これに対して、ミュケナイ文明の世界では、神的王ワナクスは王の絶対性を担保する表象の体系を整備することさえできなかった。つまり、ミュケナイ文明では、オリエント世界では普遍的にみられる威圧的な王の像やレリーフはまったくみられず、王個人の名前さえもどこにも記されていなかった<sup>21)</sup>。オリエント文明の影響を受けて成立した文明であるが、後のギリシアの都市文明に接近するような要素<sup>22)</sup>が垣間見えるのである。

### 1.2. 暗黒時代<sup>23)</sup>

繁栄を誇ったミュケナイ文明ではあるが、紀元前1200年頃に突然崩壊する。宮殿はことごとく破壊された。猛火に包まれた形跡がほとんどの宮殿跡に残っており、破壊は北から南へと進んだ<sup>24)</sup>という。その原因については、侵略・内部抗争・奴隷の反乱・地震・干ばつ・海賊、あるいは度をこした官僚化の弊害がもたらした制度崩壊など<sup>25)</sup>様々に指摘されているが、まだ定説はない。前1200年のカタストロフと言われるように、文明の破壊はギリシア本土だけでなく、それは東地中海世界の全域に及んでいた。まさにこの時代は、危機と混乱の時代だったのある。ヒッタイト帝国は滅亡し、エジプト新王国も衰亡へと向かっていく<sup>26)</sup>。

ギリシア世界では、この後二度と宮殿文明が再建されることはなかった。王朝を中心とした宮殿文明がその社会にとって適合的であれば、例えば中国文明がそうであるように王朝が何度滅ぼうともまた新たな帝国＝宮殿文明が形成されるものである。であれば、破壊の現場で実際に手をくださったのが誰であれ、

宮殿を中心とした社会システムがギリシア世界ではもはや必要とされなくなっていた<sup>27)</sup>ことは明らかであろう。

いずれにしても紀元前11世紀になると各地でミュケナイ文明の痕跡は衰微し、ギリシアは考古学的証拠の極端に乏しい時代をむかえる。暗黒時代といわれるゆえんである。記録は消滅し、壮大な建築物は失われ、人口は全盛期のおそらく5分の1以下におちこんだ<sup>28)</sup>と言われている。遠隔貿易とよく整備された農耕制度も、ほとんど壊滅した。農業生産力は劇的に低下し、かろうじて自給自足できる農耕生活に戻ってしまった。宮殿の官僚制のかわりに、地方ボスたる豪族が各地の小村落を勢力圏にとりこもうとして互いに争った。わずかにのこされた住民はもはや定住民ではなく、脅威があれば移住することが多かった<sup>29)</sup>。鉄器文化がギリシアに登場するのはこの時代である<sup>30)</sup>が、ミュケナイ時代の書き言葉である線文字B、政治・社会・経済組織、オリエント世界の伝統と共有する戦争の形態なども、ポリス形成後のギリシアにはほとんど伝わらなかった<sup>31)</sup>。ギリシア各地の大宮殿の突然の崩壊とともに消滅したのである。

つまりこの暗黒時代にオリエント的な専制国家を形成していた比較的強大な王国は、姿を消したのであり、これに代わって「<sup>パシレウス</sup>族長」が小範囲の共同体の首長として自立した。そして、民族移動の波がミュケナイ文明の社会的遺制の多くを洗い流した<sup>32)</sup>のである。オリエント的専制の垂直的な社会的結合とポリスの水平的な社会的結合とは、まったく異質である。その大転換を可能にしたのは、まさに暗黒時代の荒波によるオリエント的専制の社会的遺制の一掃だったのである。

ところでポリス形成直前の暗黒時代、いわゆる「ホメロスの王政」の段階の暗黒時代を垣間見せてくれるのは、ほかならぬホメロスの叙事詩である。それは、もはや官僚制を備えたミュケナイ社会のそれとは大きく異なっていた。<sup>パシレウス</sup>王は、<sup>コローノ</sup>村共同体の部族の長の中でもっとも尊敬されている者<sup>33)</sup>として現れているにすぎなかった。トロイア戦争の総帥アガメムノンもあくまでも共同体成員のなかの有力者の一人、いわば「同等者のなかの第一人者」(primus inter pares)<sup>34)</sup>にすぎなかった。このような王権を制約する公的機関は二つあ

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

り、一つは、有力者たる名門貴族からなる「評議会」(boule<sup>ブーレー</sup>)であり、もう一つは、分割地所有農民＝戦士からなる自由人総会すなわち「民会」(agorē<sup>アゴレー</sup>)である<sup>35)</sup>。共同体のあらゆる重要事は、王を補佐するとともにその権利を制限する評議会にはからなければならなかった。異常事態にあつては、民会にも相談しなければならなかった<sup>36)</sup>。王は、臣下たちを対立させるような紛争を解決する責任をもつ裁判官・神々を祭る儀式の最高の長たる神官・戦時には軍隊を統率する最高指揮官としての役割を有する<sup>37)</sup>にすぎなかった。したがってホメロス時代の王は、専制君主や封建貴族のように農民を隷属させ、支配しているわけではなかった。

東地中海世界を襲った前1200年のカタストロフは、ギリシア世界が独自の歩みを進めるためには幸運なことでもあった。というのは、ヒッタイト帝国が崩壊し、エジプト新王国がナイル流域へと退却した結果、地中海東部沿岸地域には「力の真空」<sup>38)</sup>が生じていたからである。ギリシア世界へのオリエント世界からの干渉や影響は最小限度に食い止められた<sup>39)</sup>。それゆえギリシアは、独自の社会形成への歩みをゆっくりと進めることができたのである。

### 1.3. ギリシア・ルネサンス<sup>40)</sup>

紀元前8世紀になると、ギリシア世界は暗黒時代を脱し、歴史の中に再び登場する。人口が急増し、生活は、物質的にも精神的にも豊かになってきた。そして何よりも、法律や政治制度を整備した小国家、すなわち都市国家ポリスがギリシア各地で誕生する。ミュケナイ時代の宮殿の遺跡には、アテナイのアクロポリス（城砦）の場合のように、ポリスの守護神の神殿が建てられることが多かった。国家統合の中核は、今や王権ではなく、ポリス共同体の象徴ともいふべき守護神であった<sup>41)</sup>。

ギリシア本土でのポリスの形成と呼応するかのようには、ギリシア人はエーゲ海沿岸や地中海沿岸などのいたるところにギリシア都市すなわちポリスを建設しはじめた。植民都市の建設である。植民によって、ギリシア人の活動する世界は地中海全域に拡大し、それにともなって交易活動も盛んになった。フェニ

キアやエジプトとの海上交易も、規模をはるかに拡大して復活した<sup>42)</sup>。物資の移動が大規模かつ広範囲に進み、経済活動が活発化した<sup>43)</sup>。

ギリシア人の居住地がエーゲ海周辺から地中海沿岸各地へと拡散し、しかも、それぞれが独立したポリスとしての歴史を歩むことになった。異邦の地で見慣れぬ原住民と接するようになった植民都市の住民は、ギリシア本土に残った人たちとの共通の絆をますます意識するようになった<sup>44)</sup>。かれらは文化的な相違を拡大するよりも、むしろギリシア人としての共通の文化を内容豊かに育てていった。その際の接着剤の役割を果たしたのが、ホメロスの英雄叙事詩であり、そして古代オリンピックの祭典であった<sup>45)</sup>。

最古のギリシア文学、ヘシオドスの詩とホメロスの作品が書かれたのも、この時期のことである<sup>46)</sup>。そのことに与かって力があつたのは、400年余の中断をへてギリシア人がふたたび読み書きができるようになったことである。ギリシア世界に、ミュケナイ王宮の書記官だけしか読み書きできないような、難解な線文字Bに替って、フェニキア文字を改良したアルファベットが登場する<sup>47)</sup>。それははるかにわかりやすく使いやすかつた。文字の使用が王宮の書記官だけの特権から、市民にも開放されたのである。新しいアルファベットで書かれたホメロスの英雄叙事詩をもちえたことは、ギリシア世界にとって大きな財産となった。それはまたギリシア人とギリシア語を話さない人々とを分つことになった。

ギリシア人としてのアイデンティティ、一体感を熟成させたもうひとつが、古代オリンピックの祭典である。

ギリシアは、深い峡谷や入り江によって地形が細かく分断されていたため、地域ごとの独立性が強かつた<sup>48)</sup>。1000以上のポリスが成立し、それぞれが自分たちの伝統に誇りを持ち、近隣のポリスとの間で絶えず戦争を引き起こしていた。しかし、ギリシア人はそれぞれのポリスに固有の守護神とは別に、全ギリシア的な神々への信仰を共有していた。全ギリシア的な神域としては、オリュンピア、デルフォイ、ネメア、イストミアの4つがあり、そこで開催される祭典にはギリシア各地から多くの人々が参加していた<sup>49)</sup>。

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

その中でもオリュンピアは最古の最も威信のある競技祭典の地であった。オリュンピアはペロポネソス半島西部のエリス地方に位置し、ゼウス神が祀られている。紀元前1000年頃には、オリュンピアでゼウス神の崇拝が盛んになり、豊穡の祭典に併せゼウスの神域で簡単な徒競争が行われるようになった<sup>50)</sup>。4年ごとにオリンピックが開催されるようになるのは、そもそもゼウス神の祭典が4年ごとに開催されていたから<sup>51)</sup>である。

最初の競技会、すなわち第一回オリンピックが開かれたのは紀元前776年のことであり、最初の競技会からほぼ50年間は一つの競技しか行われなかった。それは、ゼウスの祭壇に聖火をともすための徒競争であり、それ以来それが最高の種目となった<sup>52)</sup>、という。

このオリンピックを開催したのは、オリュンピアから北西に約65キロのところにあるエリスの貴族であった。このことについては、次のような伝承がある。

当時のギリシアは疫病と戦争で荒廃しており、窮地に陥ったエリスの王イフィトスはデルフォイの神託にうかがいを立てた。そこで、災禍を終わらせる唯一の方法は、オリュンピアで競技会を開催することだと告げられた。神託に従いエリス王は、第一回のオリンピックを開催した。それが紀元前776年のことである。以来、競技の審判を選び、祭典のあらゆることを細かく管理してオリンピックを取り仕切るのは、代々エリスの貴族の役目となった<sup>53)</sup>。

オリンピックは、夏至から2回目の満月に合わせて開催された。夏の暑い盛りで開催であった。それは、ギリシアの地が冬に降雨が集中し、この時期にはほとんど降らないということ、麦の収穫と脱穀が済み、ぶどうの収穫の前という農閑期だったということ、7月の酷暑期からはずれており暑さも少しやわらぎ始めているということ、そして何よりも地中海での航海にもっとも適している季節でもあった<sup>54)</sup> ことなどによった。

オリンピックに伴う聖なる休戦は、古代のきわめて重要な伝統だった。絶えず戦闘を繰り返していたギリシア人も、この時だけは魔法にかけられたかのように武器を置いた。聖なる休戦の期間中はいかなる軍事攻勢も禁じられ、裁判

や死刑も行ってはならなかった。その主な目的は競技会に向かう選手や観客の安全を守ることと、聖域となるエリス全土が汚されないためだった。当初は競技会をはさんで前後1か月だったが、イタリアのギリシア植民地や小アジアなど遠くから観客が集まるようになり、前後2か月に延長された。聖なる休戦は、なんと第一回大会のときから実施されていたのである<sup>55)</sup>。

古代オリンピックは、紀元394年にローマ帝国の皇帝テオドシウスによってキリスト教以外の異教の儀式を禁止する命令によって廃止されるまで、およそ1200年間、4年に一回、一度も欠かさずにオリュンピアの地で開催された<sup>56)</sup>。はじめは近隣の有力者だけが参加するだけのものであったが、次第にペロポネソス半島全域、さらには全ギリシア世界から参加者がやってくるようになり、オリュンピアは、紀元前7世紀には全ギリシア的な神域としての地位を確立した<sup>57)</sup>。

競技会は文字通り何百というギリシアの地方都市の祭典でも行われていた。そして他の聖域でも競技会がおこなわれたが、それはオリュンピアでの競技会開催から200年近くたってからのことであり、ほとんどはオリュンピアで編み出された競技種目を踏襲していた<sup>58)</sup>。紀元前6世紀には、オリュンピアの地で開催されるオリンピックが古代ギリシアの最高の祭典とみなされるようになった。驚異的な人気を誇り、古代の最大の恒例行事となった。ギリシア人にとって、オリンピックを観ずに死ぬことはたいへんな不幸だった<sup>59)</sup>のである。

## 2. 市民的なるものの成立

### 2.1. クレーロスと天水農業

ミュケナイ文明の崩壊は、農民を貢納制から解放した。暗黒時代のギリシア諸種族の移動は、共同体規制の弛緩という結果を生んだからである。ギリシア人は集団として移動し、先住民の土地を侵し先住民を隷属させた<sup>60)</sup>。やがてかれらは定住し、新しい村共同体を形成したが、その共同体の家族は、夫婦、親子より成る小家族を中心とするようになった。アリストテレスは、ポリスが

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

「いくつかの村から生じ」<sup>61)</sup>たと述べているように、この村共同体は、ポリス形成の前段階となった。

生産が個別に行われる条件が増すにつれ、私有財産は土地にまで及ぼされ、耕地の共有や共同耕作はなくなり、これらの家族には集団占拠した土地（共有地）が、分割地として配分された。共同体の成員に持ち分として分配された土地は、籤（くじ）引きで分けられた土地という意味で、ギリシア人はこれを「クレーロス」(klēros)あるいは「クラーロス」(klāros)と呼んだ<sup>62)</sup>。それはもはやヒツジやヤギ、馬などを飼う牧草地ではなく、小麦などの穀物を栽培する十エーカー（4ヘクタール）ほどの耕地であり、そこには境界を示す石がおかれ、オリーブやぶどうなどの果樹園には垣根や溝がめぐらされていた<sup>63)</sup>。

つまりポリス形成前夜のギリシアの農民は、王の土地を耕す隷属民でもなく、貴族の土地を借りる借地農でもなかった。私有地をじぶんの家族と若干の奴隷とを使い、直接生産者として耕す独立自営農民であった<sup>64)</sup>。

アーレントは、「ポリスの創設によって部族や種族のような血縁にもとづいて組織された単位がことごとく解体したというのは、アリストテレスが勝手に作った理論や見解ではなく、単純な歴史的事実であった」<sup>65)</sup>と指摘しているが、血縁的な原理の解体は、太田秀通氏によればポリス形成の前段階の村共同体レベルでも進んでいた。定住以前は、人々を結びつけるものは血縁的なつながりであったが、定住後は新しい地縁的なつながりが生まれていた。同じ土地に住みかつこれによって生活する人々は、次第にこの土地に対する愛着を強め、単なる血のつながりを越えた共同体を形成していた<sup>66)</sup>。村共同体がポリス形成の前段階として出現したのである。

分割地という私有地を得たギリシアの農民の経済的自立を可能にしたのは、何よりもその風土的条件であった。山と湾がせまりその間にかろうじて盆地や平野が広がるような地形では、降雨にたよる以外の農業を発達させることはできなかった。このことは、ヘロドトスに語ったエジプト人の言葉からも明らかである。

「というのは、ギリシアの国土はことごとくその灌漑はエジプトのように

河によらず、雨を俟つということを知ったエジプト人が、ギリシア人はいつかきつと大変な当てはずれをして恐ろしい飢饉に襲われるであろう、といったことがあるからである。その言葉の意味は、もし神がギリシアに雨をふらせようとせず旱魃を起こされたならば、ギリシア人は飢饉の厄に見舞われるであろう、彼らには天帝ゼウスから賜る以外には水を得る当てがないから、というのである。」（『歴史』巻2・13）<sup>67)</sup>

エジプトなどのオリエントの帝国では、大規模な土木事業によって作られた運河から耕地へ水を引き入れることによって初めて耕作が可能となる灌漑農業が行われていた。これに対して、ギリシアにおいては行われていたのは、冬季の雨に頼るといふ天水農業であった<sup>68)</sup>。まさにオリュンピアにいます神ゼウスが降らす雨に頼っていたのである。つまり農業を営むのに強大な王権の力を必要としていなかったのである。小麦や大麦やぶどうを育てるのは冬季の雨であり、そしてその雨水が地中にしみこんで湧き出る泉が灌漑や飲料水の源であった。泉があるところに村落が発達した。

農業生産性の向上のためには、私有地を多くし、家族による個別労働の巧みさと配慮によってこれを実現するほかはなかった。泉から水をひく溝を整備し、耕作の畝の深さを適切にし、剪定を巧みにおこない、種蒔きや植物の成長に対する配慮を忘れないことなど<sup>69)</sup>が必要であった。個別的生産労働の日常的反復による経済的自立性の確立は、共同体に対する共同体成員の地位を確実にし、共同体成員相互の関係を、独立的人格の平等を原則とする結びつきにした<sup>70)</sup>。

## 2.2. 農民＝戦士

村共同体にとって避けることのできなかった集団労働は、かれらの生活と生産の場を隣接共同体の攻撃から守ることであった。富の多寡による村の有力者たる貴族と平民という階層分化は生じていたが、それが身分制的な支配被支配関係に転化することはなかった<sup>71)</sup>。当然のことながら奴隷制的な主従関係になることもなかった。かれらは貴族と同じ自由民として村共同体の平等な成員だった<sup>72)</sup>のである。したがって、防衛のための戦争が、村共同体の有力者た

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

る貴族のみによって担われることはなかった。経済的に自立していた分割地所有農民は、自ら武装し歩兵として貴族と一緒に戦闘に参加し、防衛の一翼を担ったのである。

ホメロスは、その題材をミュケナイ文明にとっているが、そこに描かれていたのは、民会、評議会、密集方陣による集団戦、そして分割地における集約農業などなど、まさにポリス形成前夜の社会であった<sup>73)</sup>。『イリアス』には、英雄同士の決闘や武勇自慢の描写があふれているが、その背後には武装した歩兵集団の戦いが見てとれる。

「軍勢は王の言葉を聞いて一層緊密に隊伍を固めたが、それはあたかも一人の男が、風の力を防ぐべく、隙間なく石を組んで高い館の壁を築くよう、そのさまにも似て兜と臍金を打った楯とがぴたりと接し、楯と楯、兜と兜、人と人とが凭れ合う。馬毛の飾りを戴いた兜は、首を垂れるたびに、前立の角が触れ合ったが、それほどにも軍勢は隙間もなく密に立ち並んでいた。」<sup>74)</sup>  
（『イリアス』第16歌）

「隙間なく石を組んで高い館の壁を築くよう、そのさまにも似て兜と臍金を打った楯とがぴたりと接し」「隙間もなく密に立ち並」ぶ軍勢の姿は、個人戦を戦う騎兵のそれではない。それも民会に召集されるような歩兵であり、ポリス形成後にはっきりした姿をあらわす重装歩兵の密集方陣の隊形を彷彿とさせるものである。その動員されている兵士が、たんなる王の隷属民でなかったことは、トロイア攻撃の是非を決める集会の場に一般兵士も召集されていることから明らかである。ホメロスの英雄叙事詩の中で描かれている唯一の平民が、テルシテスである。その一介の兵士にすぎないテルシテスが、全軍の総帥アガムメノンに他の戦士の面前で公然と罵倒している。

「兵士らはみな腰をおろし、それぞれおとなしく席に控えている中で、ひとりテルシテスのみは、口汚く罵りつづけてやまなかった。…さてこの時もまた、大将アガムメノンに向かって金切り声をあげ、悪口雑言を並べ立てたが、アガムメノンに対してはアカイア軍の兵士らの怒りも激しく、心中穏やかならぬものがあつたのである。」<sup>75)</sup>（『イリアス』第2歌）

ここには、王の権威に対立して公然と自分の意見を述べてはばからない平民の姿がホメロスによって活写されている。もちろん、すぐに英雄オデュッセウスによって叱責され、皆の笑いものになっているが、しかし、ここには王と対等な立場で発言する平民の姿がある。

アメリカの軍事史家ヴィクター・ハンセンによれば、当時の戦争のほとんどは、肥沃な土地を戦利品として獲得するための戦いというよりも、「無骨で短気な」農民たちがくりひろげた土地の境界線をめぐってのいさかい<sup>76)</sup>であり、いわば村としての威信をかけた戦いであった。山向こうからやってきた、似たような装備の農民を、白昼の戦いでその一部を撃破し、士気をくじき、敗北感と屈辱感にまみれさせ、あわてて逃げ帰るような眼にあわせれば、それで十分だった<sup>77)</sup>。

記録に残る最初で最後のギリシア暗黒時代の戦いは、紀元前700年以前のあるとき、カルキスとエレクトリアというライヴァル都市が肥沃なレランティオン平原をめぐっての戦い<sup>78)</sup>であった。暗黒時代の末期におきたこの戦いは、「貴族による騎馬戦から、広範な基盤に支えられた歩兵の戦いへの最終的な移行」<sup>79)</sup>をつけるものだった。ポリスの形成へと向かう歴史において決定的だったのは、武装自弁の農民戦士による密集方阵での戦いが、貴族の個人戦を圧倒したことである。騎兵たる貴族は、戦場までは馬に乗って行ったが、戦いの場では馬からおり、農民戦士と同列で戦った<sup>80)</sup>のである。

### 2.3. 英雄的精神とアゴーン

海外に雄飛し、そして、精神世界でも活躍することになるギリシア人の基礎にあったのが、ホメロスの英雄叙事詩に鼓舞された英雄的精神であり、「アゴーン」(agōn)の精神である。

暗黒時代をようやくにして脱したギリシア人は、再び海を越えて交易を始めた。ギリシア本土にポリスを建設しただけでなく、エーゲ海沿岸から地中海沿岸までポリスを建設し始めた。そこで異邦人と遭遇したギリシア人は、自らの民族的アイデンティティの再確認を迫られた<sup>81)</sup>。歴史の表舞台に再び登場し

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

活躍を始めるにつれ、自らの一体感、そして精神的な拠り所を輝かしい過去の記憶と伝承のなかに求めていた。そのような彼らの心性に、トロイア戦争での英雄的な戦いを力強く歌うホメロスの叙事詩は強く訴えかけるものをもっていたにちがいない。

すでに述べたように、ミュケナイ文明は豪壮で戦闘的であった。ギリシア人はこの失われた文明の中に英雄的、超越的なものを見た。エーゲ海を越えて小アジアのトロイアを攻める英雄譚は、ギリシア人にとっては、親しみやすいものであった。というのは、ギリシアの大部分の地域にとっては、海が最良の交通路であり、多くの地域にとっては、唯一の交通路だからである。海がどこにも見えないという地域はほとんどない。ギリシア人は、「その歴史の夜明け以来、船乗り」<sup>82)</sup>でもあったのだ。農民であるとともに船乗りとして育ったために、狭い地域に埋没しないで済んだ。農閑期には、交易を求めて海外に出かけたりした。思いもよらない冒険の機会もあったにちがいない。海外での見聞は、彼らを農民のもつ偏狭さ頑迷さなどから救ってくれた。さらに、家族経営の農民として自立した生活は、かれらに個としての自立を促した。それは、「英雄的人間を礼賛する祖先以来の気風」<sup>83)</sup>と合致していたのである。

ホメロスの背後には、明らかに口承叙事詩の伝統があり、その伝統はミュケナイ時代に発しており、その頃の状況を語り伝えたのだと推定されている<sup>84)</sup>。このような太古の物語によって高揚された想像力は、英雄の世界観を作り上げ、ギリシア人はそれを最も貴重な財産のひとつとして育んだ<sup>85)</sup>。『イリアス』『オデュッセイア』などのホメロスの英雄叙事詩は、ギリシア人の倫理規範のよりどころとなり、文芸作品としてだけでなく「万人の手本となるべき道德上の教科書」<sup>86)</sup>としても用いられたのである。

ギリシア人は、競うことが好きだった。彼らは、とにかくあらゆることにおいて競争した。アゴーンとは、闘技とか競技あるいは競争という意味であるが、演劇も、陶芸も、演説も、詩の朗読も、彫刻も、すべてが競争だった。旅行者は宿で早食いや大食いに挑み、医師は手術の腕や論文で優劣をあらそった<sup>87)</sup>、という。ギリシア人にとって最高の娯楽は、誰かれとなく競いあうことだった。

農業労働の日々を謳った農民詩人ヘシオドスさえも、海を越えて競技会に参加しているのである。

「わしはこれまで、広漠たる海を船で渡ったことは一度しかない、  
その一度とはアウリスからエイボイアへ渡った時、……  
ここからわしは、英邁の王アンピダマースの葬いの競技に加わるべく、  
カルキスにわたった。剛毅の王の息子らは、  
莫大な賞品を予告し賭けてくれたが、あえていう、  
その折の競技で、わしは歌競べに勝ち、把手のある三脚釜を見事手に入れたのじゃ。

その釜はヘリコーン山のムーサたちに奉納した。

ムーサたちが始めて、わしを妙なる歌の道に導いた下されたその場所  
でな<sup>88)</sup>『仕事と日』)

つまり、彼によると、たった一度だけ海をわたって外国に行ったことがある。それは、アンピダマースという王が亡くなったとき、その息子たちが催した父親の供養のための競技会に参加するためであった。彼が参加したのは、詩歌の競技であり、見事に優勝した。そこでもらった賞品を詩の才能を与えてくれた詩の女神ミューズに捧げた、と誇らしげに語っている。

結婚式や葬儀で人が集まれば競争が始まり、さらに、当時は毎週のように宗教上の祭典が執り行われ、競技会も併せて開催された。とりわけスポーツの競技会はあらゆる口実をつけて催された<sup>89)</sup>、という。「ルールを遵守しながら名誉を求めて競い合う、競争（アゴン）する心性」<sup>90)</sup>こそが、ギリシア社会に活力を付与し、市民精神を育くんだのである。

ギリシア人のスポーツ競技への熱中は、同じ地中海文化圏に属しながらもローマ人やユダヤ人とはまったく相容れないものであった。ギリシア人はトレーニングも競技も裸体でおこなっていた。まさにギリシア的ともいべき特徴である。「ギュムナシオン（体育場）」という言葉は、「ギュムノス（裸の）」からきていた<sup>91)</sup>。ギュムナシオンは公共の建物であったが、裕福な市民が建てて寄進することも多かった。そこは若者が運動競技以外にも集団で学ぶのに理想

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

的な場所だった。アテナイの哲学学校、プラトンのアカデメイアとアリストテレスのリケイオンが両方ともギムナシオンに創設されたのは、けっして偶然ではなかったのである。

このようなギリシア人のスポーツ競技や競争への熱中を可能にしたのは、古代ギリシアでは、春と晩夏に長い農閑期が存在したことである。雨は冬に集中しており、その時期に播種を行い、初夏に大量の人手がいる小麦の収穫が行われた。そして、秋の果樹の収穫の間までは、農閑期であった。古代ギリシアにおいては、この農閑期の存在が重要な意味をもっていた。というのも、都市国家相互の戦争や運動競技会の催される祭典は、いずれもこの農閑期のいわば季節的行事だったからである。市民たちは、夏になると武器を手にして戦争に繰り出し、あるいは名誉を求めて競技会へと赴いた<sup>92)</sup>。この時期は、また航海にもうってつけの季節だったからである。

### 3. ポリスの形成と市民

#### 3.1. アテナイとテセウス伝説

アテナイにおけるポリスの形成は、民主政期に国家的な英雄として崇拝されていた神話上の王テセウスの功績に帰せられている。

「アイゲウスの死後、テセウスは大きな驚嘆すべき仕事を思い立ち、アッティカに住んでいた人々を一つの町に集<sup>シユノイキスモス</sup>住させ、それまでは散在していた全部に共通の利益のために呼び集めることが困難であるばかりでなく時には互いに不和となって戦うこともあった人々を一つの国家のひとつの民衆（デーモス）とした。さて、彼は部落ごとに氏族ごとにまわり歩いて説きつけた。平民や貧民はただちに彼の訴えを受け容れたが、有力者たちには王のいない国制と民主政を約束し、自分はただ戦争の指揮者および法律の守護者になるだけで、他のことについてはすべての人に平等を認めるとやくそくした。…そこでそれまでそれぞれの部落にあった公会堂（プリユタネイオン）や議事堂や役所を廃止して、すべてに共通な一つの公会堂と議事堂を現在の町にあ

るところに作り、その国家をアテネと名づけ、共通の祭典パンアテナイア祭を創始した。…それからテセウスは約束のように王政を廃し、神々のことを手はじめにして国制を秩序づけた。」<sup>93)</sup>（『プルタルコス英雄伝』）

テセウスが一つのプリュタネイオン<sup>94)</sup>を作ったというのは、ポリスの統合と独立を象徴する聖なる火を燃やし続けるための共通の「かまど」（ヘステイア）を備えておく建物としての市庁舎<sup>フリユタネイオン</sup>を作ったということであり、ポリスを一つの「祭祀団体」とした<sup>95)</sup>ということであった。

ポリスの形成は、もちろん、単なる村々の結合ではなく、実際に人びとが都市に移り住むという意味での集<sup>シユノイクスモス</sup>住によってなされたのだが、それでもあくまでも村共同体という団体の結合としてなされたのである。村共同体は、ひとつの祭祀団体であった。集<sup>シユノイクスモス</sup>住とは、その村共同体が祭祀団体としてのまとまりを放棄したということであり、村共同体相互の「兄弟盟約」によってポリスという単一の祭祀団体を形成したということであった。

ウェーバーは都市の成立と存続を可能ならしめたものとして、「一方においては、宗教的に兄弟の契りを結ぶこと、また、他方においては、自弁で軍事的武装を行うこと」<sup>96)</sup>としているが、武装自弁の分割地所有農民を中心に構成された団体としてのポリスは、「市民たちの一市民としての資格にもとづく一団体的信仰」<sup>97)</sup>によって一体となったのである。ポリスの中心的メンバーは分割地所有農民であり、かれらが「ポリスの人びと」という意味で「ポリータイ」(politai)と呼ばれた。「ポリータイとしての権利」がまさに「市民権」<sup>98)</sup>であった。

テセウス伝説に戻ろう。

集<sup>シユノイクスモス</sup>住し、ひとつのポリスを作るというテセウスの提案に対して平民たちはすぐに賛成したが、有力者たる貴族が難色を示した。それゆえ国王テセウスは、貴族に譲歩するのである。彼は、「有力者たちには王のいない国制と民主政を約束し、自分はただ戦争の指揮者および法律の守護者になるだけで、他のことについてはすべての人に平等の関与を認めると約束した」<sup>99)</sup>のである。集<sup>シユノイクスモス</sup>住が実現した暁には、自ら王政を廃することを有力者すなわち貴族に約束し、彼

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

らが「神事を司り、役人になり、法律の教師となり、聖俗のことがらの解説者になることを認め」<sup>100)</sup> たのである。

紀元前8世紀頃にギリシア各地で集<sup>シュノイクスモス</sup>住によるポリス形成を促したのは、ウェーバーによれば、「慢性的な戦争状態」<sup>101)</sup>である。村共同体同士の戦いだけでなく、より強力な外敵からの侵略にも備える必要があった。それだけでなく村共同体内部では、経営努力によって力をつけてきていた分割地所有農民（＝平民）と貴族の対立も増大していた。対外的戦争や貴族と平民の対立というような危機は、一般的には王権の拡大に結びつくものであるが、ギリシアでは、分割地所有農民の経済的自立を背景にした村共同体の勢力の伸長もあって王権は逆に衰退していたのである。テセウス神話が示しているように、衰退していたホメロスの王権はその統治権を貴族に譲渡した。ポリスの形成は神話とは逆に、王によってではなくまさに貴族によってリードされ、外敵から共同体を守ることを口実に「村共同体内部の平民を抑え、統治権を独占するための方策」として企図されたのである。それゆえ、集<sup>シュノイクスモス</sup>住によるポリスの形成の本質は、太田秀通氏によれば、「村々の貴族層の階級的結集の実現形態としての統一評議会すなわちアレイオス・パゴス評議会の創設であり、貴族政ポリスの形成」<sup>102)</sup>であった。

### 3.2. 都市空間

ギリシアの人びとに集<sup>シュノイクスモス</sup>住を促しポリス形成に導いたのは、すでに見てきたように、ギリシア世界の慢性的な戦争状態であった。それゆえ、ポリスは、何よりも平和を守るための防衛団体として形成された。村共同体は多くの場合、城壁や公共建造物をもたなかった。これに対してポリスは、集<sup>シュノイクスモス</sup>住した人びとが外敵の来襲にあたって逃げこむことができ、包囲に耐えることができるような小高い丘に城壁を築き、そこに守護神を祀る神殿を作った<sup>103)</sup>。そこは、アクロポリス (acropolis) と呼ばれたが、その原義は「高所の要塞」<sup>104)</sup> すなわち城砦のことである。アクロポリスはミュケナイ時代の宮殿跡に建立されることが多かった。市民を守る神の座所としての神殿は、都市の景観上の要となり、

まさにここに国家としてのポリスが存在するというを内外に示すものであった。

ポリスは都市ではあったが、その中心をなしたのはもちろん分割地所有農民であり、商工業者とともに集<sup>シュノイクスモス</sup>住することで成立した市民団の居住地という意味での都市であった。アクロポリスの麓に、公共施設とともに、城壁に囲まれた市街地が広がっていた。ポリスの全構成員は、一定の閉ざされた区域内でびったり寄り添って生活していたので、かれらは強固な一体感と親近感を持っていた。どのポリスも、神秘的に隔絶した神的専制君主をもたなかったし、特権的な祭司を独立の階層として保護したりはしなかった。ポリスの構成員は、農民、職人、船乗りから成り立っていて、多くの者は二つの職業を兼ね、三つを兼ねているものさえいた。製造や工芸に従事している人々も、あるいは、海に生計の道を求める人々も、みな土地に親しんで育ち、土に生きる道を心得ていた。このような人々は関心事と環境を同じくしていたから、互いに平等に付き合う傾向があり、貧富の差はあっても概して同じ生活様式をとっていた<sup>105)</sup>。城壁と市民が集まる公共建造物を構築することで、ポリスは、国家として結集した市民団の恒常性を確保したのである。

公共施設としては、市庁舎と民会の会場たる評議会議事堂や露天劇場なども作られた<sup>106)</sup>。そこに隣接にしてアゴラ (agora) という市の立つ広場があった。アゴラは、アクロポリスや役所や劇場などとセットになった広場であり、それ自体がいわば共同体全体のための公共の広場であった。アゴラというギリシア語は、もともと、「集める」という意味の動詞からきた名詞である<sup>107)</sup>。アゴラは、市民の買出しの中心であると同時に、市民の情報の渦巻くところでもあった<sup>108)</sup>。そこは、市民にとっての活動の中心地であり、集まって自由に意見を交換できる広場であった。あらゆる話題が、特に政策が、雄弁率直に、また幾分かの見識をもって議論された。反面では感情的な口論、野卑な嘲笑、口汚い悪口も助長する。役柄や家柄の仮面をつけ、その陰に隠れていることはできなくなった<sup>109)</sup>。このような言論空間の成立は、ギリシア人の強烈な個性を育てあげた。

### ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

アテナイにおいてこのようなアゴラを中心にもった「公共空間」が創出されたのは、紀元前508年のクレステネスの改革によってである。彼は、それまでの中心市（貴族層）による農村領域（平民層）の支配を打破して、市民団の一体性に基盤をおいた社会体制を創出した<sup>110)</sup>のである。

### 3.3. 市民

ポリスは都市であると同時に国家でもあった。いかなる上部団体からも独立し、政治団体としての自由を享受していたからである。しかしながら、常設の官僚装置や常備軍を備えていたわけではなかったため、市民団がまさに国家そのものであった。

「参政権は自費で武装し得る人々に与えられていた」<sup>111)</sup>（『アテナイ人の国制』第4章1）のである。つまり、市民は戦士として国家の防衛にあたるだけでなく、国家の運営も担った。ポリスは、「審議と採決に関する公職に参与する資格のある者」<sup>112)</sup>（『政治学』第3巻第1章）としての市民の献身的な努力によって担われていた。

紀元前430年、ペロポネソス戦争1年目の葬儀演説においてペリクレスは次のように述べている。

「吾々が享受している政体は、隣国の法律を模倣するようなものではなく、むしろ吾々自身が他の人々の模範になっているのである。そして少数者ではなく、多数者によって治められているがゆえに名称においては民主制と呼ばれている。しかしながら、法律上では私的係争の面で全員に平等の権利が与えられているものの、評価に際しては各人が何事か名声を博するに応じて優先的に公的栄誉[役職]を与えられるのであって、能力よりも階級によって評価されるのではない。また貧困ゆえに世に埋もれて、ポリスのために有益なことを為す能力がありながら、それを妨げられるということもない。しかも吾々は公的な活動の面で自由に行動しているが、日常私生活における相互間の猜疑心の面でも同様であって、隣人が気ままに振る舞ったからとて立腹せず、また不機嫌な顔を見せて、実害はないにしても、見た眼に不快感を与

えるようなことはしない。」<sup>113)</sup>（『歴史』第2巻37）

アテナイ市民は、政治参加の権利の平等を確保することで、支配服従という権力関係を排除し、政治過程から暴力を排除した。市民権を有する市民によって構成されていた公的領域においては、市民は法の下に自由で対等な存在となり、それゆえ言葉だけを武器とする政治の世界を確立したのである。アーレントによれば「政治現象としての自由は、ギリシアの都市国家の出現と時を同じくして生まれた」のであり、「ヘロドトス以来、それは、市民が支配者と被支配者に分化せず、無支配関係のもとに集団生活を送っているような政治組織の一形態を意味していた」<sup>114)</sup>のである。アテナイ市民が享受していた平等、すなわち法の下における平等は、イソノミアと呼ばれていたが、「人為的な制度たる法すなわち法律によって人びとを平等にする都市国家を必要とした」<sup>115)</sup>のである。

戦いも市民の公に対する責任と勇気とを育んだ。アリストテレスは、勇敢の徳について次のように述べている。

「勇敢なひとほど恐ろしきに耐えるひとはいないのである。最も恐ろしいものは、しかるに死である。…すぐれた意味において勇敢なひとというべきは、うるわしき死について、またおよそ、たちまちのうちに死を招来するときことがらについて恐れることのないひとにほかならない。こうした事態の最たるものは、だが、戦いの際のそれであろう。」<sup>116)</sup>（『ニコマコス倫理学』第3巻第6章）

重装歩兵の密集方陣による戦いは、投げ槍などの飛び道具を使うことなく、身に帯びた槍や刀などで相手と肉薄しながら戦う白兵戦である。トゥキュディデスは密集方陣戦法につきまとう恐怖感をいきいきと描いている。

「そもそも二つの軍隊がぶつかり合う時、どちらもそれぞれの右翼の方向へ押しだされ、敵の左翼を自軍の右翼が取り巻く形になるのが普通である。なぜそうなるかといえば、どの兵士も無防備の右半身を守ろうとして、右隣の兵士の盾の方でできるだけ体を寄せるからであり、盾がしっかりと重なり合っている所が、最も防備の固いところだと思うからである。そしてこの動

ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

きの原因を作るのは、右翼の端に位置する兵士である。無防備の半身を敵の槍先からかわそうと気遣うこの兵士につられて、その他の兵士も次々と同じ行動をとるのだ。」<sup>117)</sup>（『歴史』第5巻71）

密集方陣は、奥行きがおよそ八列、左右の幅は様々で100人から200人の兵士で組まれていた。それゆえ、平原の向こう側から隊列をなしてやってくる槍ぶすまをみすえて退かない勇気が必要であった。「密集方陣に不可欠な団結心は、市民が責任感と平等主義という観念を育むうえでの積極的な推進力にな」<sup>118)</sup>った、という。

市民団を構成する市民は、その大半は分割地所有農民であったが、かれらは眼まなざしを農業生産のみに向けているわけにはいかなかった。武装自弁の戦士としてポリスの防衛を担い、軍事・裁判・財政・外交といった複雑な公共の仕事にも責任を持たざるをえなかったのである。

## おわりに

ギリシアにおけるポリスの形成と市民の成立について、歴史学の知見を借りながら駆け足でみてきた。そもそもの疑問は、ギリシア世界で水平的な社会的結合、つまり、市民共同体がなぜ成立しえたのかであり、都市国家ポリスとはいいながら市民の大半は農民であるのに、さらにはオリエント世界の帝国に比すと豆粒のように小さいポリスが、とりわけアテナイが、後世の歴史を変えるほどの文化的生産性をなぜもちえたのか、であった。その課題にいささかなりとも答えることができたかのどうかについては、読者の判断に委ねるしかないが、最後にもう二点だけ簡単に指摘し、本稿を閉じたい。

ギリシア、殊にアテナイの知的生産性の高さをもたらした市民の多面的な活動は、何よりも市民に余暇をもたらしたギリシアの風土に負うところが大きいことはいうまでもない。と同時に、家内奴隷制が広く普及していた<sup>119)</sup>から可能だったともいえる。

アリストテレスは、次のように述べている。

ポリスは、家<sup>オイコス</sup> (oikos) から組成されている。その家<sup>オイコス</sup>は「奴隷たちと自由人たちとから成り立つものである」<sup>120)</sup>『政治学』第1巻第3章)。奴隷の存在は自明の前提であり、「他のもののものであることのできる者、…理知を〔彼みずから〕もつことはないが、それを理解する程度に理知に与かる者、これが自然による奴隷<sup>121)</sup>」なのである。そういう人にとって、主人たる市民の「奴隷であることは有益でもあり、正しいことでもある」<sup>120)</sup>『政治学』第1巻第5章)。

このような奴隷正当化の議論は、倫理的・知的に誠実な哲学者であったアリストテレスとはとても思えないようなものである。その原因について、ポール・カートリッジは、次のように指摘している。

「奴隷制というものがギリシア人にとっての現象（ファイノメナ）と通念（エンドクサ）にあまりに深く根を下ろし、そして（太古の昔から、あるいは少なくともホメロスの時代からこのかた）ギリシア人が呼吸する空気の中にあまりに大きな部分を占めてきたという要因が考えられる。」<sup>123)</sup>

二点目は、すでに言及していることだが、ポリスの自生的かつ自発的な形成発展が可能であったのは、ギリシアがオリエント文明の辺境にあり、しかも近隣にポリス形成を妨げるような専制国家が存在しなかったという、歴史上きわめて例外的で幸運な国際環境<sup>124)</sup>にあったからではないかということである。オリエントの専制国家がいち早くギリシアを征服し、新しい芽を殺してしまうといったようなこともなかった。つまり、ギリシア人は、オリエント文明の辺境において、しかも近隣にこれを脅かす強国のない国際環境の中で、ポリスという市民共同体の新しい芽をゆっくりと育てることができたのである。

## 注

- 1) モーゼス・I・フィンレー（山形和美訳）『古代ギリシア人』（法政大学出版局、1989年）62頁参照。
- 2) Hannah Arendt, *The Human Condition* (The University of Chicago Press, 1958, paperback edition 1989) pp. 26-27. (志水速雄訳)『人間の条件』（筑摩書房、1994年）47頁。
- 3) *Ibid.*, p. 26. 前掲書、同頁。

ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

- 4) Aristotle, *The Politics of Aristotle*, edited and translated by Ernest Barker (Oxford University Press, 1946, reprint 1977), p. 3. アリストテレス（牛田徳子訳）『政治学』（京都大学学術出版会，2001年）8頁。
- 5) ホメロス（松平千秋訳）『イリアス 上』（岩波文庫，1992年）69頁参照。
- 6) 周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社，2005年）25頁参照。
- 7) 前掲書，42頁。
- 8) 伊藤俊太郎編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』（講談社，1974年）245頁参照。
- 9) 周藤芳幸，前掲書，37頁参照。
- 10) Cf., Victor Davis Hansen, *Wars of the Ancient Greeks* (Washington: Smithsonian Books, 1999) p. 27. ヴィクター・デイヴィス・ハンセン（遠藤利国訳）『図説古代ギリシアの戦い』（東洋書林，2003年）31頁参照。
- 11) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *Ancient Greece: A Political, Social, and Cultural History* (New York: Oxford University Press, 1999) p. 24.
- 12) Cf., Victor Davis Hansen, *op. cit.*, p. 27. 前掲書，31頁参照。
- 13) ジョン・キャンブ，エリザベス・フィッシャー，（吉岡晶子訳）『図説古代ギリシア』（東京書籍，2004年）61-62頁参照。
- 14) 前掲書，60頁参照。
- 15) 伊藤俊太郎，前掲書，246頁参照。
- 16) 太田秀通『生活の世界歴史3 ポリスの市民生活』（河出書房新社，1975年）24頁参照。
- 17) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *op. cit.*, pp. 24-25.
- 18) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』（岩波書店，1968年）211頁参照。
- 19) Cf., Victor Davis Hansen, *op. cit.*, p. 27. 前掲書，31頁参照。
- 20) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』，211頁参照。
- 21) 周藤芳幸，前掲書，42頁参照。
- 22) 伊藤俊太郎，前掲書，247頁参照。
- 23) 「暗黒時代」とは，この紀元前1000年を前後とする時代，もっと広くとれば諸宮殿が崩壊した紀元前1200年頃からポリスが誕生してくる紀元前750年頃までのことである。この論文では，従来の慣用にしたがって暗黒時代という時代表記を採用しているが，暗黒時代という表記が価値否定的な印象を与えることもあって，最近では価値中立的な「初期鉄器時代」という時代名が用いられるようになってきている，という（周藤芳幸，前掲書，44頁参照）。

- 24) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 79 頁参照。
- 25) Cf., Victor Davis Hansen, *The Other Greeks: The Family Farm and the Agrarian Roots of Western Civilization*, with a New Preface and Bibliographic Essay (University of California Press, 1995) p. 28.
- 26) 周藤芳幸, 前掲書, 42 頁参照。
- 27) 前掲書, 同頁参照。
- 28) Cf., Victor Davis Hansen, *Wars of the Ancient Greeks*, p. 33. 前掲書, 35-36 頁参照。
- 29) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 33. 前掲書, 36 頁参照。
- 30) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 21 頁参照。
- 31) 前掲書, 31 頁参照。
- 32) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 226 頁参照。
- 33) クロード・モセ (福島保夫訳)『ギリシアの政治思想』(白水社, 1972 年) 10 頁参照。
- 34) 太田秀通『テセウス伝説の謎—ポリス国家の形成をめぐる—』(岩波書店, 1982 年) 43 頁。
- 35) 前掲書, 同頁参照。
- 36) 伊藤俊太郎, 前掲書, 251 頁参照。
- 37) クロード・モセ, 前掲書, 11 頁参照。
- 38) Michael Mann, *The Sources of Social Power volume 1: A history of power from the beginning to A.D. 1760* (Cambridge University Press, 1986) p. 191. 森本醇・君塚直隆訳『ソーシャルパワー：社会的なく力の世界歴史 I』(NTT 出版, 2002 年) 209 頁。
- 39) 周藤芳幸, 前掲書, 43 頁。
- 40) ギリシア・ルネサンスという用語は, 桜井万里子氏が「ポリスの時代」(桜井万里子編著『ギリシア史』, 51 頁参照) で使われている表現を拝借した。この時代を表現するに, まさにぴったりだと思ったからである。入口に膾炙した表現であるかどうかについては心もとないが, ギリシア史の専門家が使用されているものだから大丈夫だろうとあっての使用である。
- 41) 藤縄謙三『ホメロスの世界』(魁星出版, 2006 年) 26 頁。
- 42) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 44. 前掲書, 56 頁参照。
- 43) 桜井万里子, 前掲書, 56 頁参照。
- 44) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 21 頁参照。
- 45) 桜井万里子, 前掲書, 57 頁参照。
- 46) 前掲書, 21-22 頁参照。
- 47) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 44. 前掲書, 56 頁参照。

ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

- 48) トニー・ペロテット, 前掲書, 33頁参照。
- 49) Cf., Mogens Herman Hansen, *Polis: An Introduction to the Ancient Greek City-State* (Oxford University Press, 2006) p. 37.
- 50) トニー・ペロテット, 前掲書, 33-4頁参照。
- 51) 村川堅太郎『オリンピア』(中公新書, 1963年) 73頁参照。
- 52) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 221頁参照。
- 53) トニー・ペロテット, 前掲書, 57頁参照。
- 54) 村川堅太郎, 前掲書, 74頁参照。
- 55) トニー・ペロテット, 前掲書, 56頁参照。
- 56) 前掲書, 20頁参照。
- 57) 桜井万里子, 前掲書, 58頁参照。
- 58) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 221頁参照。
- 59) トニー・ペロテット, 前掲書, 20頁参照。
- 60) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 341頁参照。
- 61) Aristotle, *op.cit.*, p. 3. アリストテレス, 前掲書, 8頁。
- 62) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 341頁参照。
- 63) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 44. 前掲書, 56頁参照。
- 64) 伊藤俊太郎編著, 前掲書, 252頁参照。
- 65) Arendt, *op.cit.*, p. 26. アーレント, 前掲書, 45-46頁。
- 66) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 341頁参照。
- 67) ヘロドトス(松平千秋訳)『歴史上』(岩波文庫, 1971年) 169頁。
- 68) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 414頁参照。
- 69) 太田秀通『スパルタとアテネ—古典古代のポリス社会—』(岩波書店, 1970年) 50-51頁参照。
- 70) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 414頁参照。
- 71) 太田秀通『スパルタとアテネ—古典古代のポリス社会—』, 50-51頁参照。
- 72) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 35. 前掲書, 41頁参照。
- 73) 太田秀通『テセウス伝説の謎—ポリス国家の形成をめぐる—』, 45-46頁参照。
- 74) ホメロス(松平千秋訳)『イリアス下』(岩波文庫, 1992年) 124-125頁。
- 75) ホメロス(松平千秋訳)『イリアス上』, 52-53頁。
- 76) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 46. 前掲書, 58頁参照。
- 77) Cf., *ibid.*, p. 52. 前掲書, 64頁参照。
- 78) Cf., *ibid.*, p. 34. 前掲書, 40頁参照。
- 79) *Ibid.*, p. 35. 前掲書, 同頁。
- 80) Cf., *ibid.*, p. 35. 前掲書, 41頁参照。
- 81) 周藤芳幸, 前掲書, 49頁。

- 82) C.M. バウラ（水野一・土屋賢二訳）『ギリシア人の経験』（みすず書房，1978年）18頁。
- 83) 前掲書，30頁。
- 84) 藤縄謙三，前掲書，27頁参照。
- 85) C.M. バウラ，前掲書，29頁参照。
- 86) 高津春繁『ホメーロスの英雄叙事詩』（岩波書店，1966年）3頁。
- 87) トニー・ペロテット，前掲書，33頁参照。
- 88) ヘーシオドス（松平千秋訳）『仕事と日』（岩波文庫，1986年）86-87頁。
- 89) トニー・ペロテット，前掲書，33頁参照。
- 90) 周藤芳幸・村田奈々子『ギリシアを知る事典』（東京堂出版，2000年）152-153頁。
- 91) ジョン・キャンブ，エリザベス・フィッシャー，前掲書，227頁参照。
- 92) 周藤芳幸・村田奈々子，前掲書，39頁参照。
- 93) プルタルコス「テセウス」（太田秀通訳）（村川堅太郎編）『プルタルコス英雄伝上』（ちくま文庫，1987年）32頁。
- 94) 古代ギリシアでは，共同体のあるところ必ず「かまど」（hestia）が祭られ，したがって，各都市には「市の炉」があり，聖なる火が燃やし続けられた。市が植民都市を建てる場合にも，市の炉の火が新市にもたらされた。市庁舎（Prytaneion）とは，ヘステアを祭る場所にほかならず，ここで食事を受けることは最高の榮譽とされた。
- 95) マックス・ウェーバー（世良晃志郎訳）『都市の類型学』（創文社，1964年）83頁参照。
- 96) マックス・ウェーバー（黒正巖・青山秀夫訳）『一般社会経済史要論下巻』（岩波書店，1955年）183頁。
- 97) 前掲書，81頁。「ポリスを構成するに当たっての本質的な要素は，一当時のひとびとの観念によれば一，諸門閥が兄弟盟約によって一つの祭祀共同体（クルトゲマインシャフト）に結集するということであった。すなわち，個々の門閥がそれぞれもっていたプリユタネイオンを，一つの共通のプリユタネイオンによって置き換え，この都市プリユタネイオンにおいて〔各門閥選出の〕プリユタニスたちが彼らの共同の聖餐会を催すことにしたのであり，これがポリスを構成する本質的な行為だったのである。」（前掲書，184頁）。
- 98) 太田秀通『生活の世界歴史3ポリスの市民生活』（河出書房新社，1975年）25頁。
- 99) プルタルコス，前掲書，32頁。
- 100) 前掲書，33頁。
- 101) マックス・ウェーバー（上原専祿・増田四郎監修，渡辺金一・弓削達訳）『古

## ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

- 代社会経済史』（東洋経済新報社，1963年）200頁。
- 102) 太田秀通『テセウス伝説の謎—ポリス国家の形成をめぐる—』，242頁。
- 103) ジョン・キャンブ，エリザベス・フィッシャー，前掲書，116頁参照。
- 104) 桜井万里子，前掲書，52頁。
- 105) バウラ，前掲書，15頁参照。
- 106) 太田秀通『スパルタとアテネ』，57頁参照。
- 107) 太田秀通『生活の世界歴史3 ポリスの市民生活』，35頁参照。
- 108) 前掲書，同頁参照。
- 109) C.M. バウラ，前掲書，15頁参照。
- 110) 前沢伸行「ポリスとはなにか」弓削達編『地中海世界』（有斐閣新書，1979年）25頁参照。
- 111) アリストテレス（村川堅太郎訳）『アテナイ人の国制』（岩波文庫，1980年）20頁。
- 112) *The Politics*, *op.cit.*, p. 95. アリストテレス『政治学』，116頁。
- 113) トウキュディデス（藤縄謙三訳）『歴史1』（西洋古典叢書，京都大学学術出版会，2000年）183頁。
- 114) Hannah Arendt, *On Revolution* (Penguin Books, 1973) p. 30. 志水速雄訳『革命について』（中央公論社，1975年）29頁。
- 115) *Ibid.* 前掲書，同頁。
- 116) Aristotle, *The Nicomachean Ethics*, translated with an Introduction by David Ross (Oxford University Press, 1980) p. 64. アリストテレス（高田三郎訳）『ニコマコス倫理学上』（岩波書店，1971年）108-109頁。
- 117) トウキュディデス（藤縄謙三訳）『歴史2』（西洋古典叢書，京都大学学術出版会，2003年）58頁。
- 118) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 52. 前掲書，65頁参照。
- 119) 太田秀通『ギリシア世界の黎明』（吉川弘文館，1965年）229頁参照。
- 120) *The Politics*, *op.cit.*, p. 8. 『政治学』，12頁。
- 121) *Ibid.*, p. 13. 前掲書，18頁。
- 122) *Ibid.*, p. 14. 前掲書，19頁。
- 123) ポール・カートリッジ（橋場弦訳）『古代ギリシア人 自己と他者の肖像』（白水社，2001年）214頁。
- 124) 太田秀通『ミケーネ社会崩壊期の研究』，419頁参照。

## 参考文献

- Aristotle (1946), *The Politics of Aristotle*, edited and translated by Ernest Barker, Oxford, reprint 1977（牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会，2001年）。

- Aristotle (1980), *The Nicomachean Ethics*, translated with an Introduction by David Ross, Oxford University Press (高田三郎訳『ニコマコス倫理学 上』岩波文庫, 1971年, 『ニコマコスニコマコス倫理学 下』岩波文庫, 1973年).
- アリストテレス (1980年) 村川堅太郎訳『アテナイ人の国制』岩波文庫.
- ホメロス (1992a) 松平千秋訳『イリアス上』岩波文庫.
- ホメロス (1992b) 松平千秋訳『イリアス下』岩波文庫.
- ヘロドトス (1971a) 松平千秋訳『歴史上』岩波文庫.
- ヘロドトス (1972b) 松平千秋訳『歴史中』岩波文庫.
- ヘロドトス (1973c) 松平千秋訳『歴史下』岩波文庫.
- ヘーシオドス (1986) 松平千秋訳『仕事と日』岩波文庫.
- プルタルコス (1987) 村川堅太郎編『プルタルコス英雄伝上』ちくま文庫.
- トゥキュディデス (2000年) 藤縄謙三訳『歴史1』西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- トゥキュディデス (2003年) 藤縄謙三訳『歴史2』西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- Arendt, Hannah (1958), *The Human Condition*, The University of Chicago Press, paperback edition 1989 (志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房, 1994年).
- (1963), *On Revolution*, Penguin Books, paperback edition 1973 (志水速雄訳『革命について』中央公論社, 1975年)
- 安藤弘 (1983) 『古代ギリシアの市民戦士』三省堂.
- パウラ, C.M. (1978) 水野一・土屋賢二訳『ギリシア人の経験』みすず書房.
- ケイヒル, トマス (2005) 森夏樹訳『ギリシア人が来た道』青土社.
- キャンプ, ジョン, フィッシャー, エリザベス (2004) 吉岡晶子訳『図説古代ギリシア』東京書籍.
- カートリッジ, ポール (2001) 橋場弦訳『古代ギリシア人 自己と他者の肖像』白水社.
- カザケヴィッチ (1995) 一柳俊夫編訳『古典期アテナイの市民・非市民・奴隷』お茶の水書房.
- Donlan, Walter, Pomeroy, Sarah B., Burstein, Stanley M., & Roberts, Jennifer Tolbert (1999), *Ancient Greece : A Political, Social, and Cultural History*, Oxford University Press.
- Garver, Eugene (2006), *Confronting Aristotle's Ethics: Ancient and Modern Morality*, The University of Chicago Press.
- フォレスト, W. G. (1971) 太田秀通訳『ギリシア民主政治の出現』平凡社.
- フィンレー, モーゼス・I (1989) 山形和美訳『古代ギリシア人』法政大学出版局.
- 藤縄謙三 (1971) 『ギリシア神話の世界観』新潮社.
- (1985) 『ギリシア文化の創造者たち 社会的考察』筑摩書房.

ギリシアポリスの形成と市民（的射場）

——（2006）『ホメロスの世界』魁星出版。

Hammond, N. G. L. (1975), *The Classical Age of Greece*, A Phoenix Giant Paperback, paperback edition 1999.

Hansen, Mogens Herman (2006), *Polis : An Introduction to the Ancient Greek City-State*, Oxford University Press.

Hanson, Victor Davis (1999), *Wars of the Ancient Greeks*, Washington: Smithsonian Books（遠藤利国訳『図説 古代ギリシアの戦い』東洋書林, 2003年）。

Hanson, Victor Davis (1995), *The Other Greeks: The Family Farm and the Agrarian Roots of Western Civilization*, with a New Preface and Bibliographic Essay, University of California Press.

橋場弦（1997）『丘のうえの民主政 古代アテネの実験』東京大学出版会。

伊藤俊太郎（1974）編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』講談社。

伊藤貞夫（1982）『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会。

一柳俊夫（2006）『古代ギリシア法思想史研究』お茶の水書房。

ジョーンズ, ロイド（1983）眞方忠道・眞方陽子訳『ゼウスの正義—古代ギリシア精神史—』岩波書店。

Liddel, Peter (2007), *Civic Obligation and Individual Liberty in Ancient Athens*, Oxford University Press.

Mann, Michael (1986), *The Sources of Social Power volume 1 : A history of power from the beginning to A.D. 1760*, Cambridge University Press（森本醇・君塚直隆訳『ソーシャルパワー：社会的な力の世界歴史 I』NTT出版, 2002年）。

マイケルソン, ジョン・D. (2004) 箕浦恵了訳『古典期アテナイ民衆の宗教』法政大学出版局。

Morris, Ian (1987), *Burial and ancient society: The rise of the Greek city-state*, Cambridge University Press.

モセ, クロード（1972）福島保夫訳『ギリシアの政治思想』白水社。

村川堅太郎（1963）『オリンピア』中公新書。

Nagle, D. Brendan (2006), *The Household as the Foundation of Aristotle's Polis*, Cambridge University Press.

太田秀通（1965）『ギリシア世界の黎明』吉川弘文館。

——（1967）『増補 共同体と英雄時代の理論』山川出版社。

——（1968）『ミュケナイ社会崩壊期の研究』岩波書店。

——（1970）『スパルタとアテネ—古典古代のポリス社会—』岩波書店。

——（1975）『生活の世界歴史3 ポリスの市民生活』河出書房新社。

——（1977）『東地中海世界—古代におけるオリエンとギリシア—』岩波書店。

- (1982a) 『ギリシアとオリエント』東京新聞出版局。
- (1982b) 『テセウス伝説の謎—ポリス国家の形成をめぐって—』岩波書店。
- Raaflaub, Kurt A., Ober, Josiah, & Wallace, Robert W. (2007), *Origins of Democracy in Ancient Greece*, University of California Press.
- Stobart, J. C. (1964), *The Glory that was Greece*, London: Sidgwick & Jackson.
- Sabin, Philip, Wees, Hans van & Whitby, Michael, ed. (2007), *The Cambridge History of Greek and Roman Warfare Volume 1: Greece, the Hellenistic world and the rise of Rome*, Cambridge University Press.
- 桜井万里子 (2005) 編著『ギリシア史』山川出版社。
- (2006) 『ヘロドトスとトゥキュディデス 歴史学の始まり』山川出版社。
- (1997) 『ソクラテスの隣人たち アテナイにおける市民と非市民』山川出版社。
- サイドボトム, ハリー (2006) 吉村忠典・澤田典子訳『ギリシャ・ローマの戦争』岩波書店。
- 芝川治 (2003年) 『ギリシア「貴族政」論』見書房。
- ジョーンズ, ロイド (1981) 『ギリシア人』岩波書店。
- 周藤芳幸・村田奈々子 (2000) 『ギリシアを知る事典』東京堂出版。
- 周藤芳幸 (2006) 『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会。
- スパイヴィー, ナイジェルスクワイア, マイケル (2006) 小林雅夫・松原俊文監訳『ギリシア・ローマ文化誌百科上』原書房。
- 高津春繁 (1966) 『ホメーロスの英雄叙事詩』岩波書店。
- Walker, Henry J. (1995), *Theseus & Athens*, Oxford University Press.
- ウェーバー, マックス (1955) 黒正巖・青山秀夫訳『一般社会経済史要論下巻』岩波書店。
- (1963) 上原専祿・増田四郎監修, 渡辺金一・弓削達訳『古代社会経済史』東洋経済新報社。
- (1964) 世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社。
- 弓削達 (1979) 編著『地中海世界』有斐閣新書。

\*本論文は、平成16年度—19年度科学研究費補助金（基盤研究（A）政治理論のパラダイム転換・研究代表者千葉眞・課題番号16203008）に基づく研究成果の一部である。